

# 日本人の色嗜好における文化依存性についての検討

熊倉 恵梨香

東京大学大学院人文社会系研究科

信田 拓也

東京大学文学部

浅野 倫子

立教大学現代心理学部

横澤 一彦

東京大学大学院人文社会系研究科

先行研究では、色の好み（色嗜好）が外的に規定された文脈によって変化することが示されてきた。本研究では内的に規定された文脈が色嗜好に与える影響を検討するため、日本人の中でそれぞれ異なる事物集合および色と結びついていると考えられる「洋風」「和風」の概念を利用し、日本人に対してある色を「米国色（米国で使われている色）」ないしは「日本伝統色（日本で古来から使われている色）」として呈示した時に、何も文脈を与えない時と比べて単色嗜好が変化するかを調べた。加えて、各色が米国色らしいないしは日本伝統色らしいと感じられるかを調べ、各色とそれぞれの文脈との関連の強さとみなした。その結果、色嗜好はこれらの文脈により変化し、内的な文脈が色嗜好に影響することが示唆された。さらにその変化量と色と文脈との関連の強さには正の相関があった。以上で示された内的な文脈による色嗜好の変化を、色から連想される事物に対する嗜好がその色の嗜好を決めるという生態学的誘発性理論の枠組みで考察した。

Keywords: Color preference, Contextual effect, Cultural difference

## 問題・目的

人の色の好み（色嗜好）は固定的なものではなく、色に関わる文脈情報によって色嗜好も動的に変化することが報告されている。たとえば四季の変化がある地域では、紅葉・黄葉の時期に近づくほどその葉の色に近い色への嗜好が上昇した[1]。こうした変化は生態学的誘発性理論[2]に基づいて説明されている。生態学的誘発性理論とは、色の嗜好が色から連想されるさまざまな事物の嗜好と連想強度の積和平均に基づくという仮説である。色に関する文脈情報が与えられると、文脈に関連した事物の連想が活性化され、色から連想される事物集合が変化する。生態学的誘発性理論に基づけば、その事物集合の変化にともなって色嗜好も変わると予測される。

先行研究では四季のように外的に与えられた文脈情報と色嗜好の関係が調べられてきたが、本研究では内的に与える文脈情報が色嗜好に与える影響を調べるため、日本人の「和風／洋風」の概念を用いて検討した。我々日本人は日本の伝統的な事物を指す「和風」という概念と、西洋の事物を指す「洋風」という概念に日常的に接している。これらの概念は事物のみならず色という観点においても、和風の事物には彩度および明度の低い特定の色相がともなう傾向があるのに対し、洋風の事物には鮮やかで多様な色がともなう傾向があるという点で特徴的な違いがある。日常的にこれらの事物に接している日本人には、西洋由来の事物ないしは日本で古来使われている事物、およびそれらの色に関するイメージが各個人の中で形成されていると予測される。本研究では西洋、特にイメージをより明確にするため対象を米国に絞り、米国で使われている色という意味での「米国色」と、日本で古来使われている色という意味での「伝統色」のそれぞれを内的な文脈

情報として用いることにし、何も文脈情報を与えないときの色嗜好をベースラインとして、同じ色を米国色／伝統色として呈示した時に色嗜好が変化するかを調べた。また、その色嗜好の変化が色に対する内的文脈の働きとの関連しているかを検討するため、それを反映する指標として参加者が色に対して主観的に米国色／伝統色らしいと感じる度合いを聞き、米国色／伝統色として見た時の色嗜好の変化との対応関係を調べた。

## 方法

### 参加者

米国色に関する実験には38名（男性27名、女性11名、平均年齢21.3歳）が参加した。以下、米国色実験群と呼ぶ。日本伝統色に関する実験には40名（男性20名、女性20名、平均年齢21.8歳）が参加した。以下、伝統色実験群と呼ぶ。いずれも日本で生まれ育った学生で、実験遂行に問題の無い正常な色覚を有していた。

### 刺激

**色刺激** パークレイ色プロジェクト32色[2]を用いた。この色セットには高彩度、中間、高明度、低明度の4種類のカットで示された8種類の色相（赤、黄赤、黄、黄緑、緑、青緑、青、紫）が含まれた。

### 方法

#### 実験1 文脈を与えない時の単色嗜好度

32の刺激色が1色ずつランダムな順で呈示され、参加者はその色をどれだけ好きであるかを「まったく好みではない」（-100）から「とても好みである」（100）までの201段階で評定した。

## 実験2 米国色／日本伝統色としての単色嗜好度

米国色実験群には、各刺激色を米国色（米国で使われている色）であるという説明とともに呈示し、その色をどれだけ好きかを評定するよう教示した。伝統色実験群には、同じ刺激色を日本の伝統色（日本で古来から使われている色）であるという説明とともに呈示し、その色をどれだけ好きかを評定するよう教示した。評定の仕方は単色嗜好度評定課題と同じであった。

## 実験3 米国らしさ／日本伝統色らしさ

米国色実験群には、各刺激色がどれだけ米国色らしいかを「まったく米国的ではない」（-100）から「とても米国的である」（100）までの201段階で評定させた。伝統色実験群には、同じ刺激色がどれだけ日本伝統色らしいかを「まったく伝統的ではない」（-100）から「とても伝統的である」（100）までの201段階で評定させた。

## 結果

### 実験1 文脈を与えない時の単色嗜好度

米国色実験群と伝統色実験群それぞれの単色嗜好には、「平均的に高彩度条件および高明度条件の色が、中間条件および低明度条件の色よりも好まれる」「黄赤および黄は低明度条件のものがもっとも好まれない」という傾向が両群ともに見られた。また両群の単色嗜好度にはカット、色相、および色ごとのいずれのレベルにおいても群間で有意な違いは認められず、両群は同じ色嗜好傾向を持っていたことが示された。

### 実験2 米国色／日本伝統色としての単色嗜好度

米国色実験群における米国色としての単色嗜好について、課題（文脈を与えない時の単色嗜好／米国色としての単色嗜好）、カット、色相の3要因参加者内分散分析を行ったところ、課題、カット、色相の3要因の交互作用が有意となった（ $F(21,777) = 1.677, p < .05$ ）。下位検定の結果、米国色として色を見た時に高彩度条件では赤、黄、紫の嗜好度が上昇したが黄緑の嗜好度が低下し、高明度条件では緑、青緑の嗜好度が低下し、中間条件では緑、青緑、青の嗜好度が低下したことが分かった。

伝統色実験群における伝統色としての単色嗜好でも同様の分散分析を行ったところ、課題、カット、色相の3要因の交互作用が有意となり（ $F(21,819) = 1.783, p < .05$ ）、下位検定の結果、日本伝統色として色を見た場合に高彩度条件では緑、青緑の嗜好度が低下し、中間条件では黄緑の嗜好度が上昇し、低明度条件では赤、黄、黄緑の嗜好度が上昇したが紫の嗜好度が低下したことが分かった。

### 実験3 米国色らしさ／日本伝統色らしさ

米国色らしさと日本伝統色らしさとの間には強い負の相関が見られ（ $r = -.71$ ）、両者は異なる傾向を示した。一般的に、高彩度条件の色は米国色らしいが伝統色らしくなく、中間条件の色と低明度条件の色は伝統色らしいが米国色らしくないと評定される傾向が見られた。

米国色らしさ／伝統色らしさの評定値と、米国色／伝統色として見た時の単色嗜好の文脈なし条件からの変化量（上昇・下降）は強い／中程度の正の相関を示

し（ $r = .71 / r = .43$ ）、米国色／伝統色らしいと感じられる色ほど米国色／伝統色として見た時に色嗜好が上昇し、逆に米国色／伝統色らしくないと感じられる色ほど色嗜好が低下するという関係が見られた。

## 考察

米国色実験群および伝統色実験群での文脈を与えない時の単色嗜好において見られた、「平均的に高彩度条件および高明度条件の色が、中間条件および低明度条件の色よりも好まれる」「黄赤および黄は低明度条件のものがもっとも好まれない」という傾向は、同じ色セットで日本人と米国人の色嗜好を調べた先行研究[3]での日本人の単色嗜好でも見られ、これらは日本人の色嗜好において頑健な傾向であると言える。

何も文脈を与えない時と比べ、米国色として色を見た時と、日本伝統色として色を見た時には、それぞれ異なるパターンで色の嗜好度が有意に変化した。このことから「米国色」「日本伝統色」という内的な文脈情報が、色の嗜好度を変化させることが示唆された。

この米国色／伝統色として見た時の単色嗜好の変化と、米国色／日本伝統色らしさの評定との関係について、米国色／伝統色らしいと感じられる色ほど米国色／伝統色として見た時に色嗜好が上昇し、逆に米国色／伝統色らしくないと感じられる色ほど色嗜好が低下するという対応関係が見られた。前者の対応関係については、米国色らしい／伝統色らしいと感じられる色は米国色／伝統色という内的な文脈が特に強く働き、色から連想される事物集合も変化しやすいと考えられ、それが色嗜好の変化をもたらした可能性がある。日本人の若年層は洋風・和風をともに好ましいものとして受け入れる傾向がある[4]ことから、それらを連想したことで色嗜好にポジティブな影響を及ぼしたのかもしれない。後者の対応関係については、そのような色に米国色／伝統色という内的な文脈が強く働くということは考えにくく一見すると直観に反するが、米国色／伝統色らしくないと感じられる色をそのように見るとすることが文化的にそぐわない色に着色された米国的／伝統的事物を連想させ、色嗜好にネガティブな影響を及ぼした可能性が考えられる。

このように、本研究における内的な文脈による色嗜好の変化は、色嗜好が色から連想されるさまざまな事物の好ましさと連想強度の積平均に基づくという生態学的誘発性理論の枠組みの中で解釈可能なものであった。その妥当性を検討するため、日本人が米国色／伝統色として見た時の色に実際にどんな事物を連想するかを調べるのが今後の課題となる。

## 参考文献

- [1]Schloss, K., & Heck, I. (2017). *i-Perception*, 8(6), 1-19.
- [2]Palmer, S., & Schloss, K. (2010). *PNAS*, 107(19), 8877-82.
- [3]Yokosawa, K., Schloss, K., Asano, M., & Palmer, S. (2015). *Cognitive Science*, 40(7), 1590-1616.
- [4]間々田孝夫 & 寺島拓幸 (2007). *応用社会学研究*, 49, 117-135.